

3 集石土坑について（第42図）

本遺跡では、平面形が方形または不整形の土坑内に、複数の礫を集めて詰めた遺構3基（SK05・SK06・SK07）を確認しており、その形態から集石土坑と呼ぶこととした。縄文時代にも同様の呼称の遺構があるが、本遺跡の例は中世に比定でき、その性格も異なると考える。

さて、本遺跡の集石土坑の特徴は、①土坑の平面規模は1.0m前後で、深さは0.6～0.7m程度を測る（SK07は底面より下位の基盤層を掘り込んだ可能性がある）、②礫は検出面からの深さが30～50cmの位置まで詰められており、底面から浮いた状態である、③礫は大小あり、円礫や角礫など多様な石材を含み、無秩序に詰められる、④埋土は褐色系の粘質土であり、炭や焼土を含む、⑤遺物は礫に混じるものと、SK05とSK06のように底面付近で出土するものがあり、前者はいずれも15世紀を下限とし複数時期にわたる遺物が混じるのに対して、後者はSK05が13世紀中頃、SK06は14世紀前半～中頃であり、時期的にずれがある。そして、放射性炭素年代測定の結果は、後者の遺物の時期に近い。

同様の特徴をもつ遺構として中世墓があるが、県内の中世墓のうち、集石を伴う例として、山口市瑠璃光寺跡遺跡^{（注18）}、下関市竜王南遺跡^{（注19）}、同坂の上遺跡^{（注20）}、柳井市向田遺跡^{（注21）}、同吉毛遺跡^{（注22）}などが挙げられる。

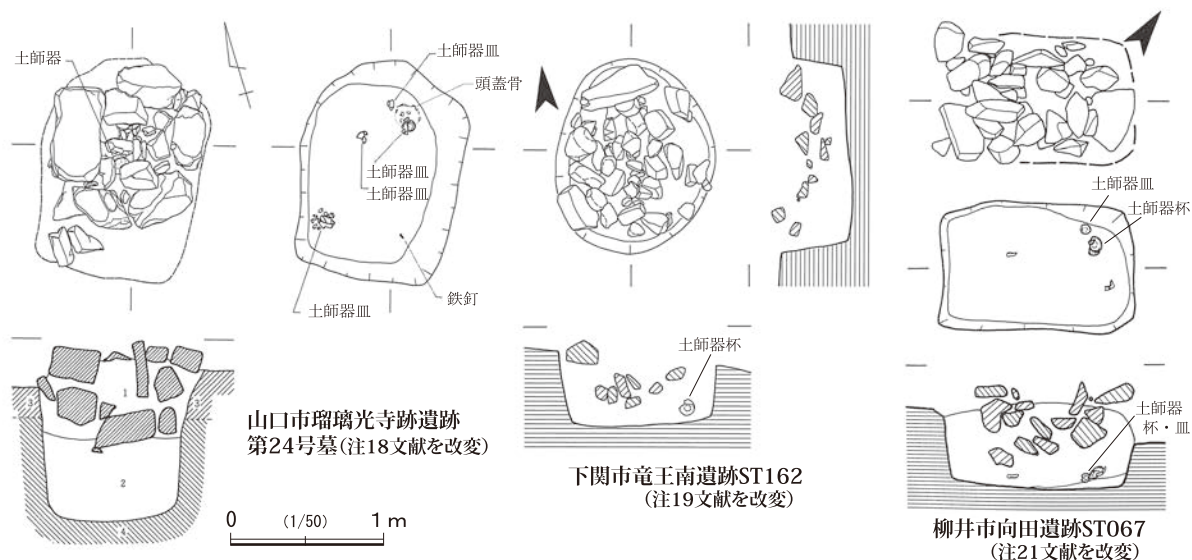
山口市瑠璃光寺跡遺跡では、五輪塔や宝篋印塔などの石塔群のほか、15世紀初頭から16世紀後葉にかけての地表施設を伴う墓178基が検出された。第24号墓は、平面形が不整長方形の墓坑内の上位に、複数の礫が埋められていた。報告書では詰石とするが、地表施設の石が沈下した可能性も指摘されている。底面付近から鉄釘1本と土師器皿4点が出土しており、15世紀中葉～後葉に位置づけられる。

下関市竜王南遺跡は、15世紀から16世紀を中心とする中世墓群で、五輪塔や宝篋印塔などの石塔群のほか、積石などを伴う182基の墓が確認された。ST162では、平面楕円形の墓坑内の上層に、積石と推定される礫群が落ち込んだ状態で検出され、底面付近からは土師器杯2点が出土した。

柳井市向田遺跡では、五輪塔や宝篋印塔を含む石塔群のほか、14世紀から19世紀にかけての地表施設をもつ墓を含む墓坑群が検出された。ST067では、平面長方形の墓坑内の中位に、地表施設の角礫が落ち込んだ状態で検出された。底面からは人骨のほか、土師器皿1点と杯2点が出土し、14世紀後半に位置づけられる。

以上の例から、木棺墓では、木棺や遺体が腐った後、墓標や地表施設として存在した礫群がそのまま土坑内に落ち込むことがあると推定できるが、その場合、棺材は残存しなくても、棺に伴う鉄釘が残ることが多い。土坑墓でも、遺体が腐った後、礫群が土坑内に落ち込んだとすれば、本遺跡の集石土坑のような状況が起こりうると考える。しかし、他の中世墓群でみられるような、周辺に地表施設となる多量の積石の痕跡がないこと、意図的に礫が詰められた可能性もあること、SK06を除き供献土器が出土しないこと、SK05とSK06の土壌サンプルの分析結果は、遺体の存在を示す有意なものではなかったことから、墓とする決め手となる積極的な根拠は認められなかった。

一方で、性格不明と報告した土坑SK10とSK13は、平面形が隅丸長方形で、規模は長軸が1.0m程度、短軸が0.7～1.0m程度であり、底面から土師器杯が置かれた状態で出土しており、土坑墓の可能性はある。時期はSK10が14世紀後半～15世紀前半で、SK13が14世紀前半～中頃であり、集石土坑の時期



第42図 県内の集石をもつ中世墓の例

とも一部重なっている。また、集石土坑とその周辺は、後述する掘立柱建物SB02の築造時に整地されたと推定でき、近世以降にかなりの削平を受けたことから、地表施設も失われた可能性がある。

このように、先に述べた集石土坑の特徴に加えて、集石土坑のほかにも中世墓の可能性がある土坑が存在し、これら複数の土坑が集まって墓域を形成したとすれば、この遺構が中世墓である蓋然性は高いと考える。

4 中世の掘立柱建物と周辺遺構（第13図）

本遺跡で検出した掘立柱建物SB02は、桁行3間（8.4m）×梁行2間（4.0m）で、床面積が33.6㎡を測る。その構成柱穴であるSP138・SP563・SP569では、複数の礫が出土しており、地下式礎石または根石の可能性がある。東側梁行に平行する柱列1は、廂あるいは塀や柵に相当し、SD04とSD05は雨落溝に相当する可能性がある。時期は、放射性炭素年代測定の結果は14世紀代、SP138・SP140・SP233から出土した遺物からは15世紀代に比定できる。

中世前期末から後期（鎌倉時代末～室町時代前半）にかけては、規模的に卓越した居館を中心として、周辺に屋敷地が配置される「居館化」の段階であり、集落は集村化し、一般集落は非常に少なくなる時期とされる。そして、山口県内では、鎌倉時代から室町時代前半期の集落が多く、室町時代後半の15世紀末頃には、大内氏館の改修などによる守護所再編に伴う在地支配の強化が在地領主の居館の求心力を向上させ、集村化を促したとされる^{（注23）}。

掘立柱建物SB02は、中規模以上で地下式礎石を伴う建物であること、周辺の遺構や包含層中から青磁や白磁等の奢侈品が出土することから、有力層の居宅かそれに伴う施設に相当する可能性がある。調査範囲からは当時の集落構成等は不明だが、掘立柱建物SB02は「居館化」に至る直前の時期の集落を構成する建物と考える。

ところで、出土遺物の年代や放射性炭素年代測定の結果、あるいは建物の構成柱穴が墓の一部を壊すことからみて、掘立柱建物の方が集石土坑よりも後に築造され则认为。このことから、集石土